

ニアの親の子供たちから、もう少し日本の若者のグローバル意識というのが恐らく高まるのではないかと考えています。具体的にいうと、α世代です。幾つかの年齢、今の時代ばらばらなので何とも言えないですが、ボリュームゾーンでいうとα世代ぐらいから、少しグローバルな感覚が変わってくるのではないかと予測しています。

それから、消費文化の背景としては、人口ボリュームが多くて、日本も豊かになってしまったときだったので、いっぱいこの人たちとともに、マーケットが生まれています、ビジネスが生まれています。『少年ジャンプ』、ファミコンそうですね、今であれば Nintendo Switch とか、『少年ジャンプ』は、この人たちが高校生ぐらいのときに600万部で、今100万部切っちゃって、大分衰えてきていますけど、それでもこういう文化をつくったり、女子では『明星』『りぼん』『なかよし』とか。それから、コンビニも団塊ジュニアと同じ年です。ばーっとこれだけ普及していったのも、やっぱりこの人たちが若いときからたむろして、コンビニの前でヤンキーがべた座りしてみたいな、そういう中で広がっていった。

カラオケもそうです。カラオケボックス。月9でキムタクがドラマを演じ、その主題歌をCDでこの人たちが買い、その人たちがカラオケで歌う、このサイクルをすごくうまくつくっていったので、カラオケボックスというのは広がっていった。

それから「エヴァンゲリオン」、いまだに、また映画化されたりしていますが、この人たちが思春期のときに大ヒットした、アニメです。

それからJリーグとかもそうですし、今では懐かしいですが、コギャル文化、ルーズソックスとか、バーバリー、ブルー

レイ、そういうのもすごく爆発的に売れた。消費力も結構強い人たちだったので、特に不景気になってしまったので、上の世代がなかなかお金を使わなくなったので、割と若者である彼らに企業のマーケティング対象が、結構狙われた時期でもあったというのも大きいと思います。

ただ、一方で、草食男子というのはこの頃から、この人たちぐらいから言われ始めています。だんだん景気も悪くなって、就職もできなくなって、女の子におごりたいけど、おごれないとか。女性も不安だから、この人と恋愛するのどうか、男の人も自分で背負っていくのつらいとか。まだ、共働きのはざまですから、そういう意味では草食男子みたいなのが、いろいろな理由で増えていった。

それから、女性の求める男性像も、バブル世代のときは三高でしたが、団塊ジュニア・ポスト団塊ジュニアからは三低なんていうふうに言われるようになります。三低というのは3つの低いです。

まず、1つ目の低いが低リスク、これはとにかく正社員。景気もバブルもはじけて、お金持ちとは言わないけど、でも、首にだけはならないでね、低リスク。

2つ目の低が低依存、これはやはり家事、育児、私に依存しないでねという。

それから3つ目が低姿勢、あなた大した収入ない、安定ぐらいしかないのだから、私に一生こびへつらいなさいよという、こういう三高から三低へと、バブルがはじけて一挙に変わっていったと言われています。

この世代を象徴するドラマ、アニメ、漫画ですが、『働きマン』と『ホテルノヒカリ』という漫画に出てくる干物女、働きマンと干物女というのがあります。

先ほど女性が特徴的だと言いましたが、働きマンというのはマスコミに勤めている女性で、あまりにも忙しく、ブラック

労働の中、恋愛も恋もできずにぼろぼろになっていく女性像というのが描かれて、当時すごく大ヒットしました。

それから、干物女、これは綾瀬はるかさんが主演でドラマ化されましたが、会社ではそつなく仕事をするんだけど、家に帰ってきたら恋愛とか興味なくてジャージとちょんまげ姿になって、缶ビール飲んで、猫と会話しているのが幸せ、こういうのを干物女と言って、当時、流行語になりました。

というのが、団塊ジュニア・ポスト団塊ジュニアになります。

それからその下、だんだん今の若者に近づいてきましたが、日本の場合は移民も少ないですから、徐々に価値観が変化していくということで、今日は若者の話をするのに上の世代から順繰りに説明していますが、流れを知るということが大切なので、そこは御理解いただきたいのです。

その次はゆとり世代という世代です。(さとり世代)と書いてあるのは、私が2013年にさとり世代という言葉をつくりまして、それが新語流行語大賞で当時話題になった。これゆとり世代のことを言っているということで(さとり世代)というふうにしています。何でさとりなのかは後ほど説明します。

まず、時代背景としては、とにかく少子化、実はポスト団塊ジュニアぐらいから少子化は始まっていたのですが、やべえぞ日本と言ってメディアが騒ぎ始めたのが、この人たちから。120万人になっちゃった。団塊ジュニアは200万人いたから、半分近くになっちゃった。やべえとって騒ぎ始めたのが、このゆとり世代ぐらいからということなんです。

少子化なのに、大学や学部の数どんどん増えていったわけですから、やっぱり競争がすごく少ない中生きてきたという

人たちではあります。

ところが、ゆとりという名前はかわいそうで、この人たちが本当にゆとっているかということとそうでもなくて、物心ついたときから、失われた20年なわけです。この上の団塊ジュニア・ポスト団塊ジュニアは、思春期から氷河期だったんです。ある程度自我ができていた。この人たちは小さいとき、生まれたときからです。一番不幸な世代は団塊ジュニアなのか、ゆとり世代なのかという議論があるぐらい、結構大変なんです。

だんだん景気はよくなって、少しはよくなっていったのですが、リーマンショックで、実はこのゆとり世代の中でも第二次就職世代、2010年頃就職した人たち、かなり就職厳しかった時期の人も含まれています。2010年から大学生の6分の1が就職浪人しているんですよ。かなり厳しい時期の人も含まれる。

それから、この人たちの特徴は、携帯第一世代、ガラケーです。中学生ぐらいから携帯を持ち始めた初めての世代がゆとり世代です。それからゆとり教育というのを受けてきた。よく言われます、教科書が薄いとかが円周率が3とか、そういう世界です。

それから特徴としては、いろいろな社会調査を見ると、とにかく若者の将来不安が異常に高まった時期でした。やっぱり失われた20年なので、将来が不安だとか、どうなってしまおうのかとってね。若者の自殺も非常に増えた時期でした。だから、そういう意味ではすごくかわいそうな世代と言えらると思います。

結果的に、この人たちどういう志向を持っているかということ、意外と安定志向が強いんです。やっぱり不幸な幼少期を過ごしていますから、何かにしがみつきたいと、安定志向がかなり強い。

だから、地方公務員人気なんかも一時、

今はすごい人気なくなってしまうているみたいですが、一時期すごく伸びた、この世代のときにすごく人気になったというところもあります。

それから、携帯、SNSによる同調志向といって、今のスマホはパソコンと一緒に高機能ですが、当時のガラケーは、結局、人とメールアドレスとかミクシーでつながって、ぺちゃくちゃ会話するだけ、以上。というものだったので、結果的には若者が小さいときから携帯を持って、何が起こったかということ、友達とおしゃべりするのが 24 時間、以上。ということです。簡単に言ってしまうと。ですので、割と同調志向がすごく高まって、「あいつうざくない？」とか、悪口陰口ばかりずーっと SNS で言ってきたという思春期を過ごしている人たちです。

それから、やっぱりお父さんもリストラされてしまって、会社潰れてしまったみたいな、非常にかわいそうな時期だったので学級崩壊、それが子供にも及ぼしている影響もあるでしょうが、それだけではないかもしれませんが、学級崩壊というのもすごく問題になった人たちでもあります。

一方で、子供の数が減ってしまったものですから、もっと下の世代からマーケティング対象として狙おうということで、

割と小さいときからマーケティング対象として狙われた人たちでもあります。

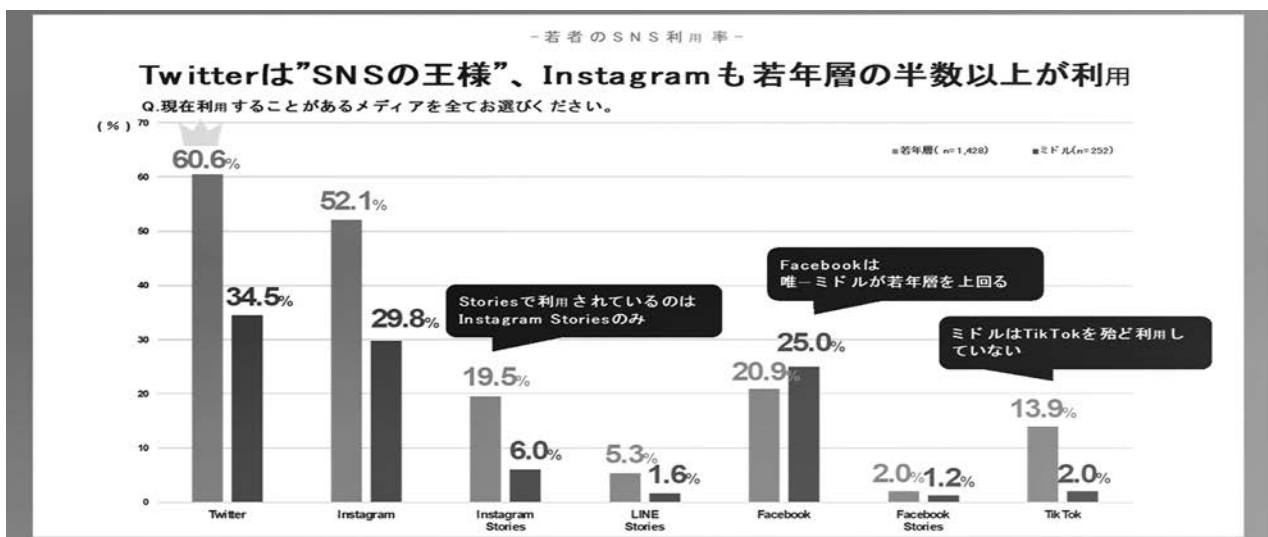
一番象徴なのは、もう潰れてしまいましたが、ナルミヤ・インターナショナルです。10 代前半の子たちをおしゃれさせようと、アパレルが大ブレイクしました。ローティーンファッションです。

ほかにもポケモンとかワンピース、セーラームーンとか子供向けのコンテンツもいっぱいつくられました。

それから、首都圏でいうと私立中学受験が過去最高ということで、実は、ゆとり教育と言いながら、受験勉強していた人たちが多いという、子供が少ないので、特に学校側も中学生からなるべく下のうちから囲っておこうということで、中学受験も盛んになったという人たちでもあります。

それから、恋愛、結婚に関しては、恋人がいないが過去最高の数値、これは経済的な問題もあるし、時代の暗さもあるし、SNS で人間関係が複雑になった、いろいろな理由がありますが、とにかく、若者が恋愛にかなり厳しくなる。

それが一方で、男 1 人では食わせていけないという、その逆張りで、割と専業主婦になりたいみたいな感じで、専業主婦志向がすごく高まった時期でもあります。専業主婦がセレブリティみたいな、



そういうイメージがあったんだと思うんです、時代が暗いときは。恋愛が難しいものですから、女子会、男子会とか、同性同士いるほうが居心地いいよねみたいになってきた。

それから、婚活とか街コンとか、割と自治体主導で、若者が恋愛結婚しないというので、こういうイベントがいっぱい開かれたというのも、ゆとり世代の時期です。

とうとう本丸、最後の数分になってから本丸に来ちゃいましたが、Z世代はどういう人たちなのだろうというと、まず、1つ目の特徴が、これ薄い棒グラフ、青棒グラフがZ世代の数値で、濃いほうが30代から50代の緑の数値です。これを見ていただければ分かりますが、全ての、いや、ほとんど全てと正確に言っておきましょう。圧倒的に、さっき言ったとおりSNS人口、Z世代が多いです。もう全て。フェイスブックだけが中年が多い。つまり、フェイスブックはもう終わりです。企業名もメタと変えていますから、本人たちも気づいているのだと思います。これはグローバルな流れです。

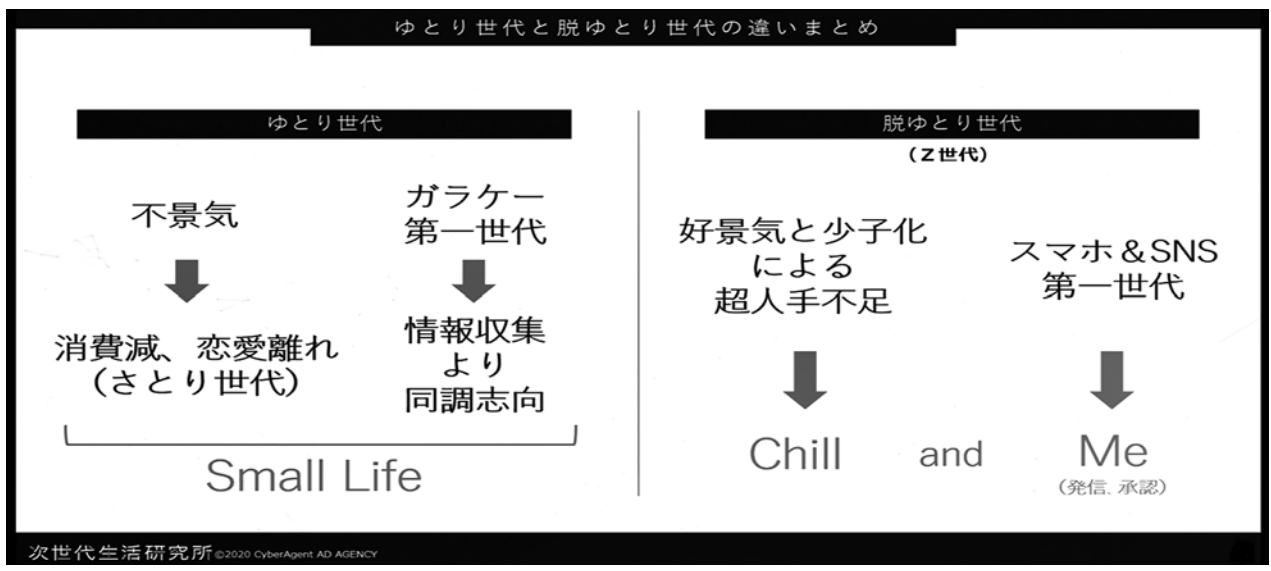
ほとんど全てのSNSが圧倒的にZ世代が多い。先ほど言ったとおり、皆さんが、高崎のいいタオル屋さん、いい飲食店、県庁の広報、何にしても今SNSが必要

な時代になっていますが、彼らにバズらせてもらわないと上の世代に情報が届かないという時代になっているということです。圧倒的にSNS人口が多いのは彼ら。ターゲットは彼らです。彼らを経由して、本丸の団塊ジュニア・ポスト団塊ジュニアにどう情報を届けるか、これがマーケティングの中で1つ大きな課題になっています。これがまず、1つ、SNS人口が多いですよ。

もう一つが、結局、この右側の脱ゆとり世代と書いたのがZ世代ですが、どういう人たちかというお話を、最後、締めますね。

ゆとり世代と比較すると分かりやすいのですが、先ほど言ったとおり、ゆとり世代はとにかく不景気の中に生きてきた。小さいときから不景気、失われた20年。だから結果的に、お金もなくなって、消費が減って、恋愛離れして、何だか悟っているような世代だねというのが、このゆとり世代を言い換えたさとり世代という言葉の意味です。さとり世代になっちゃった、暗い時代を生きただから。

一方、この右側のZ世代の左側を見てください。アベノミクスに関しては賛否両論ありますが、一応マクロ経済はよくなった中で、アベノミクスはさておき、人手不足が相当深刻になってしまったと



いうので、コロナ禍でも有効求人倍率がめちゃくちゃいい、転職もめちゃくちゃします、これがZ世代。リーマンショック後の就職氷河期もない。めちゃくちゃ、もう入りたい放題。人生全てのステージで来て来てと言われたのがZ世代。実はゆとり世代とZ世代と大きく違う。ですので、Z世代の1つ目の特徴は、若者言葉で言うところのチル、これはマイペースとかまったりという意味です。アメリカのラッパー用語ですが、もともと。今、普通に日本語になっています。俺、今チルってますとか、そういうふうにする。

だから、もう別に頑張らなくても大丈夫でしょうという感覚。だから、Z世代のほうがよっぽどゆとり世代です、時代的にいえば。これがまず1つ。

今度はゆとり世代、右側を見ていただくと、ガラケー第1世代。でも、ガラケーなんて何もできないですから、友達とめちゃくちゃするだけです。ですので、情報収集より同調志向、友達と話して、

あいつムカつくよねと、しゃべっているだけというのが、ゆとり世代。

一方、Z世代、スマホもSNS、いっぱいあります。だから、めちゃくちゃ発信するし、いいねもらいたいし、発信意欲も強いし、自己承認欲求も強い。この彼らの強い自意識をミーというふうに呼んでいます。チル&ミーがZ世代の世代特徴で、ゆとり世代は不景気とガラケーからスモールライフ、上の世代に比べると、消費金額、行動範囲ともに小さくなっているというスモールライフだったのに対して、Z世代はチル&ミー、マイペースでまったりして自意識過剰ですから、大人が取扱いにくいのは当然ですよ。

でも、こういう世代が出てきたんだよということを理解していただくと、後半のパートにつながりやすいかなというので、お話しさせていただきました。

また、パネルディスカッションのほうでお話しさせていただきたいと思います。御清聴ありがとうございました。(拍手)

講演「社会運動と若者」

立命館大学産業社会学部准教授 富永 京子氏

ただいま御紹介にあずかりました富永京子と申します。社会運動の研究者なので、特に若年層の政治意識、社会運動への、より直接的には労働組合運動ですか、意識みたいなのところを中心にお話しさせていただきます。



まず、先ほどの原田さんのお話を伺って、自分はこの世代にあるんだなというのを改めて認識させていただいたのですが、私自身はもう若者というところからは遠くて、10個上のほうにいわゆるロスジェネという言葉でされていたような先輩たちがいて、私の10個ぐらい下に、いわゆる安保法制の抗議行動なんかをやっていたSEALDsという組織というネットワークをまだ覚えていらっしゃる方もいると思うのですが、そういった方々がいる中で、ちょうどはざまにある、原田さんの概念ですとゆとり世代というのですか、その人間として、あまり社会的な意識みたいなものはないまま学生生活

を送ったのですが、ただ、上にロスジェネがいて、下にZ世代がいて、当然、政治的に意識の薄い自分というのを世代的に自覚せざるを得ない、そういうところから、では、若者が政治的であるということが、どうにも自分には意識ができない。ただ、恐らく、その時代時代の社会問題を映し出す上で、例えば、ロスジェネの貧困や不安定であるとか、あるいはZ世代の、もっと身近な例えば気候変動であるとか、ウクライナ戦争に対する、何かしたいという意識であるとか、そういうことが映し出されているのではないかと思って、その時々若年層の政治意識ですとか社会運動に対する意識を調査させていただいているところです。

まず、日本人全体として、こういう社会運動に対する意識を持っているんだというところから紹介させていただきたいのですが、こちらは、あなたはどの社会運動、どのタイプの社会運動に参加した

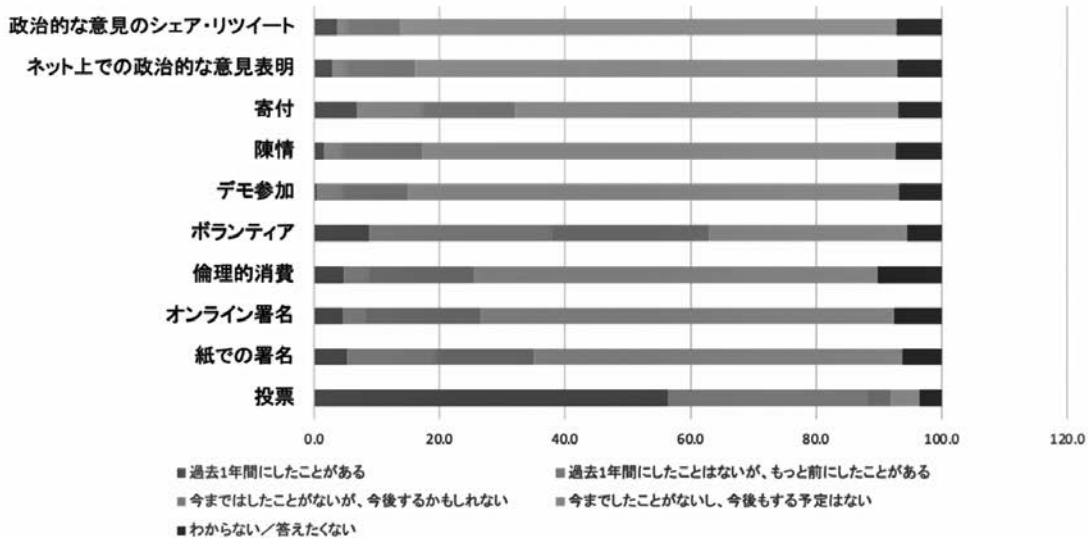
ことがありますかというのを、いわゆる全国調査で聞いてみたものになります。それを世代別にソートしたり、あるいは年齢、居住地域等で割りつけて、サンプリングして調査したものです。こちら、赤とオレンジを中心に見ていただきたいんです。赤は過去1年間にしたことがある、オレンジは過去1年間にしたことはないが、もっと前にしたことがあるという、経験率を見るものです。

投票などは、どこかの選挙で投票したことがあるということ、日本人は割と高めに出ると言われているんですね。その次に高いのは、これは社会行動、政治行動とは必ずしも言えないかもしれませんが、ボランティアも40%くらいの方が参加している。

次に、高いのが寄附と紙での署名です。これも2割ぐらいの方がしたことがあって、例えば寄附だったら、コンビニの店頭での募金か、あるいは今よく見るクラ

日本人の「社会運動ざらい」

政治参加／社会運動経験



シノドス国際社会動向研究所「生活と意識に関する調査」N=6600、インターネット経由でのリサーチパネル調査、年齢・性別・居住地域による割当法によるサンプリング。年齢は20-69歳

ウドファンディングか分かりませんが、20%ぐらいの方がやられている。紙での署名も、恐らく学校とか職場で回されたり、あるいは自治労さんでもやられていると思いますが、そういう意味で20%ぐらい参加したことがある。それぐらいの数字になっているのですが、では、どういったタイプの社会運動に参加していないかという、これはすごく分かりやすく、まず、明確に低いのがデモ参加です。日本人のデモ参加率、経験率は大体、国際比較調査なんかで見ても、先進国、50か国ぐらいの比較調査なんかを見ても、大体40位ぐらいなわけです。デモ参加率は5%ぐらいで、では、陳情とか、アドボカシーとか、提言とか、もう少しおとなしめのというか、提言的な活動だったら、デモなんかはそんなに見る機会はないけれども、そういう提言的な活動だったらどうかというと、やはり、陳情もそんなに高くないというところになります。大体、この上から4番目ですが、5%ぐらいですよ。ここから、例えば、原田さんおっしゃられたとおり、今SNS時代というか、いろいろな人たちがSNSで発信したり、インターネットで発信しているから、では、ハッシュタグの運動とかツイッターデモとか、そういったものなら参加してくれるのではないかと、思って、我々も調査を進めたのですが、やっぱり5%ぐらいしかやってない。これは読売新聞でも、先日特集記事があったけども、政治的な意見のシェア、リツイート、ネット上での政治的な意見表明というのも、大体5%ぐらいしか参加していないということで、ここから分かることとしては、とにかく参加率が低いです。国際比較のスライドは出してないですが、ISSPの世界価値観調査という調査があって、どちらでも、先ほど申し上げた

とおり、先進国50か国ぐらい見ても、40番目ぐらいかなというのが日本の社会運動参加率です。

では、何でこんなに、日本に住む人々は、日本で生まれ育った人々は社会運動が苦手なのかということなのです。

1つは、社会運動というと、これよく、質問紙調査ですとかアンケート調査の自由回答記述欄にも書かれているのですが、古臭いとか、何か学生運動、いわゆる68年から72年の学生運動、新左翼運動みたいなものがイメージされてしまう。

もう一つとして、何か色がつくのではないとか、後で申し上げますが、偏っているみたいな言い方が非常に多くなる。そういう意味でネガティブなイメージというのを付けられやすい。

では、社会運動は必要ないの、ネガティブなイメージだったらやらなくていいのということは、絶対そんなことはなくて、例えば労働組合であっても、我々が労働していて理不尽に押しつけられるパワハラみたいなものであるとか、あるいは不平等な状況みたいなのが絶対あるわけです。それは、我々自身の責任では全然ないわけですから、そういった個々人の苦しみとか痛みみたいなものは、特に弱くて不安定な立場にいる、時代のせいになりやすい、その時代のせいでしわ寄せを受けやすい若年層の人々に、より多く降りかかってくるわけですから、そういう、何か自分たちの責任ではない苦しみとか痛みというのを社会のせいにするために、若者こそ社会運動が必要なのではないかというのを、割と言ってきているというのが、自分の社会運動をしている人としての立場かと思えます。

全然宣伝とかではないので、手に取ってくださいというものではないですが、それで、中高生の人と一緒に書いたもので、『みんなの「わがまま」入門』という

本があって、これはすごく、ある若い人
 というか高校生から言われた言葉が印象
 的でこういう名前にしたのですが、いや、
 社会運動って、わがままじゃないですか
 と。

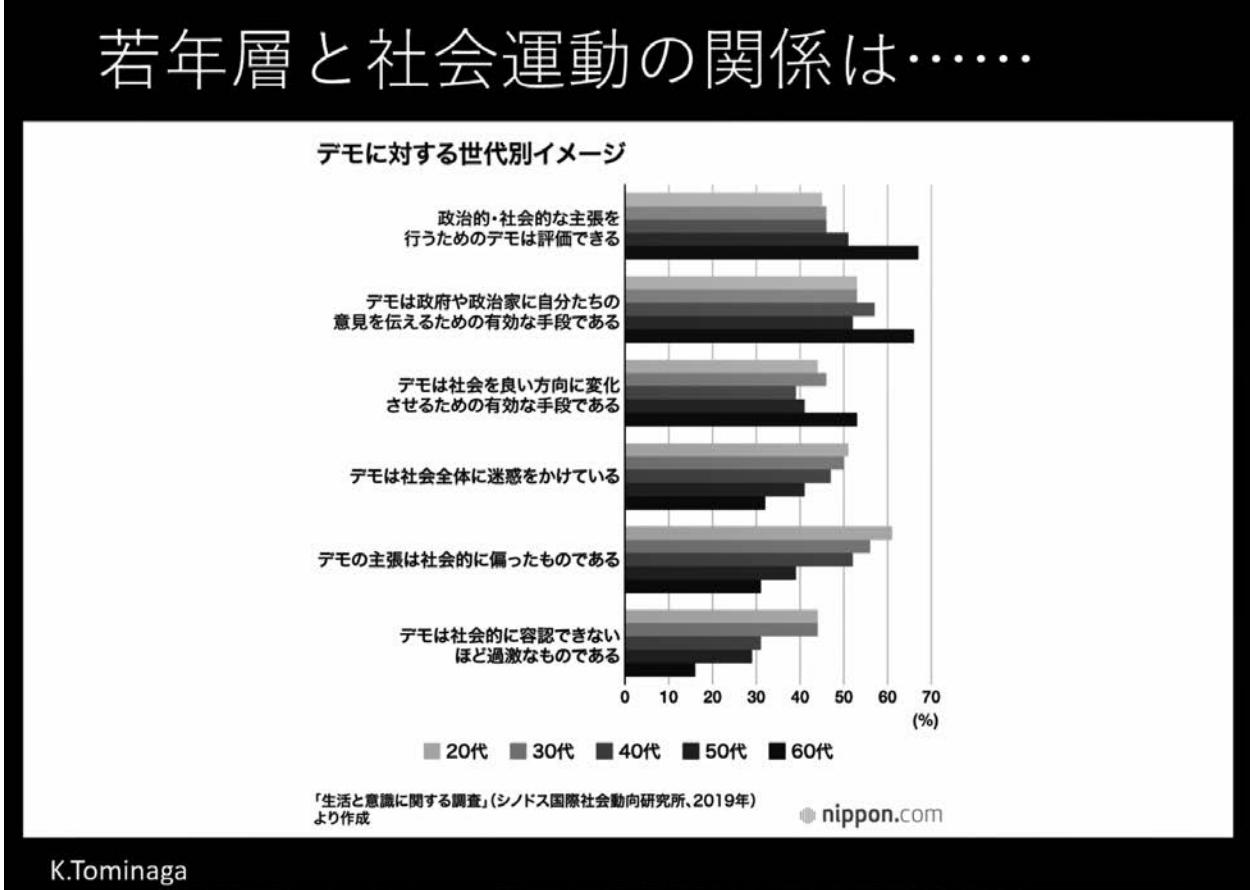
例えば、身体に障害があって、JRのエ
 レベーターが使えないとか、飛行機に乗
 るための昇降機が使えないとか、あるい
 は女性だったり、その世代がすごく求人
 倍率が低かったりして、性的・民族的に
 マイノリティーだったりして、就職がし
 づらいみたいなものを、気持ちは分かる
 けど、それを社会のせい、人のせい、政
 治のせいにするのはわがままではないで
 すか、自己中ではないですかと言われた
 ときに、これなんだと。

つまり、この人たちにとってというか、
 若い世代だけでなく、日本の社会に生
 きる多くの人にとって、社会運動、労働
 組合運動、労働運動というのは、わがま
 まで迷惑で自己中なんだというのは、す

ごく印象的だったんですね。

だからこうしたタイトルにしたとい
 うか、こうした概念を考えてみたいと思っ
 ている、つまり、社会運動はわがままに
 見えるかもしれない、自己中に見えるか
 もしれない、迷惑に見えるかもしれない
 のですが、それを超えて、声を上げなけ
 ればいけないんだよということは、少し
 考えていきたいなと思ったんですね。

すみません、ちょっと自分の活動の
 になってしまいましたが、少し戻って、
 若年層は、その中でも、日本人が社会運
 動嫌いであるということは分かりました
 ということで、若年層は社会運動に対
 してどういうイメージを持っているのとい
 うことで、デモが一番、そういうときの
 材料としても使われやすいですし、社会
 運動の典型例として持ってきたのですが、
 デモに対する世代別イメージというのを、
 6つのカテゴリーで聞いております。こ
 れも全国比較調査です。



まず、上3つを読み上げさせていただきますと、1つ目、政治的・社会的な主張を行うためのデモは評価できる。

2つ目、デモは政府や政治家に自分たちの意見を伝えるための有効な手段である。

3つ目、デモは社会をいい方向に変化させるための有効な手段であるということ、基本的にはポジティブ評価の指標になっております。

こちら、一番薄い水色が20代、次に薄いのが30代で、20代から60代までの調査ですが、50代、60代は少し濃い目の色で、濃くなればなるほど高い年代になっていくのですが、これを踏まえて、上の3つを見ていただくと分かるのですが、60代が飛び抜けてデモを好意的に評価している以外は、実はあまり世代差はないです。大体40%とか50%ぐらいの人が、デモいいじゃんとか、やれば何か意味はあるんじゃないの、有効な手段なんじゃないのとは思っているわけですよ。

では、世代差がきっちり出てくるのは何かというと、デモへのネガティブな評価です。これの下3つを読み上げさせていただきますと、1つ目、デモは社会全体に迷惑をかけている。わがままじゃないですかという、それですよ。

下から2番目、デモの主張は社会的に偏ったものである。

3番目、デモは社会的に容認できないほど過激なものである。

この3項目を見ていくと、さっきの指標だと、60代以上はあまり段差がなかったのですが、20代が一番高く、60代が一番低い、逆階段状になっているわけです。つまり、デモは社会全体、1つ1つ見ていきますと、デモは社会全体に迷惑をかけているというのを見ると、60代は3割ぐらいしか、そう考えてないわけ

ですよ。いや、デモは正当な権利でしょうと。何か政治社会に不満があったり、意見したいことがあれば、デモやっていると、7割ぐらいの60代は思っているわけですが、これ以外の20代30代になると、40代もやや怪しいと思うが、半分ぐらいの人が、デモは社会全体に迷惑をかけていると思ってしまっているわけですよ。

その次ですが、これは象徴的なもので、また後で説明しますが、デモの主張は社会的に偏ったものである。これもやはり60代の方は3割ぐらいしか、そう思っていないし、50代だと4割ぐらいしか、これだって他国に比べれば高いほうですが、そう思っていない。

ただ、20代30代40代の方は、もう半分以上が、デモ偏っているでしょう。偏っていて何が悪いという言い方もできるわけですが、社会的に偏っているでしょうという言い方をされるわけです。

最後、デモは社会的に容認できないほど過激なものであるという評価、これは全体的に低めですが、60代が10%、15%ぐらいしかそう思っていないのに対して、20代30代はその3倍ぐらい、45%ぐらいの人が、いや、社会的に容認できないほど過激なものでしょう、逮捕されてやむなしでしょうみたいな形で思っているということで、そういったネガティブな評価によって、より若い世代が社会運動をネガティブに判断しやすいというところが大きいですし、偏ったものであるというのは特に、50%以上、なんなら20代は60%がそう思っているわけで、これは少し指摘しがいがあるというか、説明が必要なのかなと思います。

政治参加が偏っているみたいな考え方の裏側にあるのは、物凄く強い、何ていうのでしょうか、中立志向と自己責任意識なのではないかと考えることができる

思います。つまり、1つに、先ほどの社会運動は迷惑じゃないですかですが、まず1つは、他人に迷惑をかけてはいけない、これは労働組合運動などやられていると特に感じる場面が多いのかもしれませんが、自分の責任で、自分で努力して解決するのが正当であって、政治のせい、社会のせいにするというのは、基本的に、他人に迷惑をかける行為だからやってはいけないでしょうということですよ。

あるいは、社会運動へのネガティブなタイプの聞き取り、ネガティブな評価をしている人への聞き取りなどをやっていると、確かに困っているときは声を上げたいけど、それで、どう思われるか怖いみたいな感覚ですよ。

先ほどの原田さんの講演の知見などと併せて見てみると、やっぱりSNSの影響も大きいと思います。つまり、SNSで声を上げてみたいという人たちが、それを忌避したり、いや、やっぱりやめようと思う理由は、外からたたかれるのがすごく怖い、あるいは身近な、SNSでつながっているような友達にどう思われるか怖いから、だから政治アカウントを独立してつくって、そこで声を上げているみたいな若い人もいたりするわけですが、そういうような相互監視意識みたいなものが、特に政治的に声を上げるときに強くなっている。

もう一つとして、やっぱり自分の苦境は自分の努力で解決すべきだという感覚が物凄く強いので、例えば、声を上げたとして、それって自分が努力してないだけじゃんとか、自分のことを棚に上げているだけじゃんとか、それって責任転嫁でしょうとか、いや、そうやって文句を言うのって後ろ向きだよとか、自己中だよとか思われるのが、すごく怖いということですよ。

これはたしか教育学というか、教育社

会学に当たるのか、よく土井隆義さんという研究者の方とかが言われていますが、基本的に今の若年層は前向きなのだ、ポジティブなのだ、まじめなのだ。ただ、その前向き、ポジティブ、まじめの裏側で失われているものは、他者を批判したり、他者というか、社会とか政治を批判したり、対抗したりする力なのだみたいな言われ方をされていて、そういう意味で、自己責任ゆえの前向きさということが言えてしまう。それはすごく鶏と卵の関係になると思うのですが、自己責任意識が高いから前向きなのか、前向きだから自己責任意識が高いのか、だからすごく、自己啓発的なコンテンツに引かれがちというのも、1つ、ある世代以降の傾向としてあるのではないかととも思います。

もう一つとして、これもすごく、若年層だけではなくて、日本に住む人、日本で生まれ育った人々特有の感覚だと思うのですが、何々だから自分は偏ってはいけないと思っていますというのが、社会運動に抵抗感を感じている人々の聞き取りですごく出てくるんですよ。

例えば、投票を忌避する人が、自分は学生で、まだ仕送りとかもらっている立場で、社会に対してのポジションが定まってないんです。だから投票というのを回避したいんですという言われ方をすると、では、それは学生だけなのかというと、そうではなくて、例えば、公務員の方々に、こういったことをおっしゃる方も身近にいるかもしれませんが、公務員だから、どこかに正式なポジションを置いたり、それを強く主張するというのは怖いですが、あるいは新聞記者さんの聞き取りなんかでもあったり、教員の方々の聞き取りでもあったりして、何しても、何かエクスキューズをつけて偏ってはいけないという意見はすごく強いのではないかととも思います。